

金澤誠先生を想う

堀越孝一

お部屋の扉をあけると、大版の本を広げられ、眼鏡をはずされて、本の上に前ごごみになっていらっしゃる。声をおかけすると、おもむろに顔をお上げになって、眼鏡をかけられ、授業の調べでねと、恥ずかしそうにおっしゃる。「十九世紀ラールス」だ。先生は十九世紀のフランス人に会っていらっしゃったのだ。このランデヴーは先生の秘めたる快樂である。なぜ秘めたるというかといえは、先生はそのことを人に知られたくないと思っただけである。大まじめにいえば（先生は大まじめが嫌いでいらっしゃったが）、先生は実証主義へお帰りになる。いや、いっぱい書いてありますからねえ！十九世紀のフランス人はなんでも書いてしまう。それが実証的だと思っていた。自分たちの書きようがすなわち実証的だと思っていたのだから、世話はない。案外、それが先生のお気に召したのだ。金澤先生、それを先刻ご承知のうえで、まじめ顔でおっしゃる、ラールスにそう書いてありますよ。そうして、先生は、ほうっと、安心なさったように、溜め息をつかれる。

わたしは金澤先生とはちがって中世だから、そちらの世界に先生をご招待すれば、さしずめ「毛皮裏地のコート」かな。

わが想像のうちに、襟にふさふさと毛皮の縁取り、踝までとどく長大なコートを先生は着ていらっしやる。頭にはエラスムスみたいな宗匠帽。これはつまり大学の教師とか、法曹とか、医師とか、なにしろそういった「自由な」職業の身分を表示する服装なのでありました。そうして先生は、ちょっと前ごみに（どうして先生のイメージはいつも前ごみなのかなあ）、両手をすり合わせ、西洋史でおまんまがいたただけるなんて、はい、ありがたいことです。「西洋史でおまんまをいたただく」というのは、金澤先生の場合、自由学芸の身分の誇りかな宣言なのであります。

わたしもすりきれた長コートを着てよいとお認めいただけたということなだろうか、金澤君が会いたいといっているよと、堀米庸三先生に紹介の労をとっていただいて、やはりフランス料理の店でしたねえ、初めてお目にかかって、おどろいた。これはもう西洋史の古典だと思っていたダヴィッド社の『フランス史』の先生があんまりお若かったので。そうして先生のお世話で、先生のおそばで同じ店の宗匠頭巾をかぶらせていただくことになって、お店の品物に手をつけてはいけませんなどと、大変有益なご教訓の数々をいただいで二十年、先生は数年前にお店をお退きになられていた。わたしはお店からの出張でバりにいた。そこに先生の訃報が入った。

この夏もまたバりにいた。春に帰国して、先生の小田原のお墓に家内と詣でて、墓石に指で大きく先生の名前を書いてさしあげて、それからバリにもどった。シテ・ユニヴェルシテルという、大学関係の宿舎が集まっている街区の一屋に宿をとった。何日かたって気がついた。いつも座って仕事をしている机の前の壁に、なにやら銅板画の肖像がかかっている。ふと気がついて、肖像画の下のネーミングを見てみたら、なんとアントワーヌ・アルノー。ポール・ロワイヤルの先生方の筆頭である。ル・グラン・アルノー、大アルノーと呼ばれる。プーラニ僧院中興の祖メール・アンジェリックの係累である。

金澤先生に見下ろされていたようなものだ。先生はアントワーヌ・アルノーなのである。なにしろ先生のお書きになられたもので一番いいのは「ポール・ロワイヤル」がらみのご文章なのだ。わたしはそう見ている。河出書房の『王冠と貴族の

『宴』の一章はアントワーン・アルノー評判記なのです。たぶんメール・アンジェリックの方にもっと関心がおありだったのだらうけれど、そうしてまたたぶん、プーラ尼僧院の歴史をさかのぼって十五世紀の「破戒尼僧院長」ユゲット・デュアメルなんかの方がもっとお好きだったのだらうけれど、そこはまあ、節度を心得ていなさって、なにしろ先生は筑摩書房の「世界の歴史」には「啓蒙主義」とか「神学から哲学へ」とか、岩波書店の「世界歴史」には「十八世紀の思想」とか、「堅いもの」をお書きになっていらっしゃるのだから。

だからわたしがヴィヨンと一緒に遊んだというユゲットに関心をもっていることがすぐくやしかったみたいだったよ、と、後日、プーラ尼僧院、すなわちポール・ロワイヤル・デ・シャンの修道院跡を歩きながら、熊岡直子にいったものだった。彼女は先生も生前よくご存じだった。一時学習院に出入りしていた。いまはパリ大学で博士論文を書く勉強をしている。フランス人の夫のジル君の運転する車で、わたしを連れて来てくれた。この若い夫婦の矜持の印であるオンボロ車は、シュールズ溪谷の曲折する道を這い進んで、林間の駐車場でへたばった。往時の大運河跡を右手に見て小道を歩くこと五六分、修道院廃墟は小さな谷の奥にあった。

ガイドのマダムは不意に言葉を切って、壁に近寄り、思わせ振ったつぷりに、脇のボタンを外した。みなさん、メール・アンジェリックです！ 壁がしずしずと開いて尼僧院長アンジェリック・アルノード・サントマドレーヌのデスマスクが現れた。ほうっ、と全員、吸い付けられるように集まる。マダムの解説にほうっとうなずいて、またぞろぞろと移動する。そこにひとり残るのが、われらが金澤先生である。そうわたしには幻に見えたということで、眼鏡をはずし、近々と顔をお寄せになって、メール・アンジェリックと親しく体面なさる。ほうっと溜め息をつかれて、なにごとかお話しになられている。わずかに残る尼僧院の遺構、天井の木組が往時をしのばせる資料館のなかである。むかし納屋だったという。

金澤先生をそこに残して、わたしはそっと納屋の外にすべりでる。宙天の太陽がきらめく槍の穂を廃墟に突き刺す。風は

止まっている。胡桃の大樹が汚れた褐色の影を地面になげる。わたしは焦燥に身を焼いて、崖に刻む階段道を見上げる。あの道を降りてこなければならぬのだ。ル・グラン・アルノーはあの道を降りてくる。裾長のローブに高襟の半合羽、四角帽のジャンセニストはあの道を降りてくる。崖の上の学校と崖の下の隠遁所、日々何回となく繰り返された往復が、ル・グラン・アルノーがジェスイット教団と戦わせた議論の情熱に熱量を提供した。かれはかならず降りてくる。わたしは知っていた。金澤誠も知っている。金澤誠は今日のことを知っていた。

だからわたしはプーラの谷に金澤先生を残してきた。金澤先生追悼の、これがただひとつ、わたしの心になうありようである。いま視野の奥にかかる絵に、金澤先生はメール・アンジェリックのデスマスクを両手で高々と掲げる。プーラの谷に動きがもどる。崖の道に男たちが動き、池のほとりに女たちが円陣を組んで交唱する。大アルノーが、パスカルが、ラシーヌがいる。パスカルの妹、妹にまさる妹と評判されたジャックリーン・パスカルがいる。サンジャンのメール・アンジェリックがいる。かの女はメール・アンジェリックの姪にあたり、太陽王がポール・ロワイヤル修道院弾圧の腹積もりをかためたときの尼僧院長であった。これら男女が金澤先生のともがらである。金澤先生、ほうっと感嘆の息をおもらしになり、うれしそうにおっしゃる、いやあ、みなさん、おそろいですねえ。